

〈資 料〉

## 労働者の抵抗

Michael Seidman, *Workers Against Work; Labor in Paris and Barcelona during the Popular Fronts*, Chapter 6, Workers Resistance, pp.,132 ~ 159, University of California Press, Berkley, Los Angels, Oxford, 1991

マイケル・サイドマン 著  
振 津 純 雄 訳

### 訳者解題

激変する世界史の現状に照らして「これ迄の人民戦線の本格的な再検討とも呼ぶような研究」が必要になっていると、日本でフランス人民戦線史の碩学として著名な平瀬徹也教授も、同稿「フランス人民戦線研究の最近の動向——M. サイドマンの近業の紹介と批判——」（東京女子大学『史論』第48号、1995年、所収）で書かれている。「そうした研究動向の打開」にむけて、そのための「挑戦の少なくとも第一歩とも見做される」実証的研究の成果が欧米諸国に現れたと、大阪経済法科大学経済研究所の人民戦線研究会で共訳を進めている3冊目の海外文献、Michael Seidman, *Workers Against Work; Labor in Paris and Barcelona during the Popular Fronts*, University of California Press, Berkley et. als., 1991 について教授は論評されている。同書の第11章 *Revolts against Work* を本誌第19巻第3・4合併号に訳載したが、本稿では第6章 *Workers' Resistance* を訳出する。

原著者マイケル・サイドマン博士はアメリカ合衆国のノース・カロライナ大学歴史学部の教授であり、1982年にアムステルダム大学に提出された博士論文から発展させて、「人民戦線期のパリとバルセロナの労働者」の社会的ならび

に政治的な意識と行動を、労働史学の主要な諸潮流に対立する視座から実証的に解明されているのが、原書の内容である。「弱体なブルジョアジーをもつ国スペインでの革命的イデオロギーの有効性と資本家が近代工業を発達させた国フランスでの革命的イデオロギーの衰退とを示す」ために、両国の「資本主義エリートと産業構造」も視野に収めて、「人民戦線期にパリとバルセロナで労働者はどのように労働し、労働者階級を代表すると主張した諸組織がそれぞれの段階で権力をどのように掌握したかを調査する」（「序章」）ことを、同書の課題とされている。

従来の労働史学の研究方法については、「マルクス主義者は労働者階級が生産諸力を引継ごうとするように望み、その無規律的で後進的または未熟な行動を克服して自己を形成しようとする」と見ている。近代化論者は、労働者の抵抗が近代的な労働現場に適応する過程を通して必然的に消滅すると論じている。文化論者は、労働者が賃労働に意味を見いだすと論じることによって抵抗がもつ意義を弱めている」（「終章」）と批判される。「だが、労働現場では経営者が厳しい規則や規制を定めて生産額を増大させようとする」ので、「視野をさらに広げると、国家や政府の抑圧力が労働を拒否する闘争に反撃した」として、労働に対する「抵抗の分析は、産業社会における国家の中核機能の理解に寄与し、国家の最も枢要な機能の一つが労働者に労働させることであるという結論に寄与する。」（「終章」）と書かれている。こうして労働がもつ意味を正面から探求する視座を設定して、「バルセロナでのスペイン革命とパリでの人民戦線運動」の諸経過を、両国の「比較社会政治史」として実証的に解明された原著者の労働史の方法と、この視座からの同書の章別構成については、前掲訳稿に付した「訳者解題」で説明しておいた。

原書の前半部（第1章から第7章まで）は、バルセロナのスペイン革命期の労働者の社会的ならびに政治的な意識と行動を、後半部（第8章から第13章まで）は、パリでの人民戦線期の労働者の社会的ならびに政治的な意識と行動を、原著者の労働史学の独自の視座から解明されている。「20世紀における労働への抵抗の分析」（「終章」）という、原著者の労働史研究の方法にとって決定的に重要な位置をもつ「労働者の抵抗」の諸相を、バルセロナの労働者のスペイ

## 労働者の抵抗

ン革命期の社会的ならびに政治的な意識と行動について実証的に検証されているのが、以下で訳出する同書の第6章の内容である。従来の人民戦線の歴史像を根本的に再検討するための視座と実証が、世界史の現局面の動態と関連して日本でもいま必要な時期であろう。

### 労働者の抵抗

われわれが見てきたように、革命前のバルセロナ労働者階級は、きわめて闘志が盛んであった。内戦が勃発する以前に、労働者たちは、労働日の短縮、賃金の引き上げ、出来高払い仕事の廃止、および伝統的な休日の擁護を含む諸要求にかんして——時には暴力、破壊行為、および作業の減速をとまなう——ストライキを行った。経済恐慌にもかかわらず、労働者たちは、生活水準の防衛に大体において成功した。彼らは、諸要求の多くを獲得するすぐれた能力をもっていることを証明した。

組合が工場を管理したとき、伝統的な労働者階級の諸要求はなくならなかったし、多くの賃金労働者は賃金の引き上げを要求しつづけ、工場の空間と時間とがもつ諸制約を避けようとする試みをあくまで押し進めた。集産企業体を運営していたCNTやUGTの闘士たちは、自分たちがかつて支持していた労働者の欲求の多くに反対した。内戦と革命の苦しい時代に、彼らはもっと多くの労働と犠牲を要求した。一般組合員の労働者たちは、これらの要望をしばしば無視して、まるで組合の闘士たちが新しい支配エリートであるかのようにふるまった。労働に対する直接的・間接的な抵抗は、ブルジョアジーが生産諸力を管理したときまさにそうであったように、支持基盤と闘士たちとの間の主要な対立点となった。バルセロナにおいて、またパリにおいて、さまざまな政治的信念を持った産業管理人たちは、労働者階級の文化がもつこの側面に直面するのを余儀なくされた。

一般組合員が厳しい要求と活動を継続したことは、アナルコサンディカリストやマルクス主義の自主管理論がもつ生産重視主義の諸仮定を明らかにした。

工場それ自体の性質を改めないで、あるいは単に工場を合理化するだけで、アナルコサンディカリストやマルクス主義者は、労働者が工場管理の活動に参加し、各自の作業場を管理するように求めた。組合活動家たちは、労働者たちに労働者としての役割を熱烈に保証するのを要求していた。実際には、生産諸手段の発展と合理化についての闘士たちの計画の内容を考えれば、労働者たちは、賃金労働者として自分たち自身の苦役に進んで参加するのを強制されていった。彼らの多くがスペイン革命の民主主義の発達に参加しなかったことは、ほとんど驚くべきことではなかった。さらに、組合闘士たちが工場集会の出席者が少ないことや、組合費の未納をしばしば嘆いたのは、ほとんど不思議なことではない。

組合活動家たちは、一般組合員のずっと追求されてきた一つの欲求を満足させようと試みた。革命のまず最初に、繊維・衣類産業のCNT組合は、多年にわたって要求してきたこと、つまり生産奨励金、とくに出来高払い仕事——CNTによれば労働者の「みじめな状態の主要な原因」<sup>1)</sup>——の廃止を実行した。UGTもまた出来高払い仕事を非難して、それを廃止するのを政府に要求していた。しかしそれでも、出来高払い仕事の廃止は、まもなくCNT自身によって攻撃を受けることになった。すなわち、

わが[CNT]組合内であって、7月19日以前に大量の出来高払い仕事ははびこっていたが、いまや固定週給が存在している産業部門において、生産高が低下した。

このことがあるのに、わが経済に確かな基盤を与えるものはまったくないので、われわれは、すべての労働者が……最大限の注意をもって、道具や原料を用い、各自の最大限の生産高を与えるだろうことを、期待している<sup>2)</sup>。

---

1) カタルニア繊維産業の全労働組合員に対して、163, A S.

2) *Boletín de información*, 9 abril 1937.

## 労働者の抵抗

ヒロナ社は、スペイン革命における労働者管理がもつ問題についてのもっとも意義深く華々しい実例を提供した。鉄道資材の会社としても周知のヒロナ社は、1,800人の労働者を雇い、バルセロナのもっとも重要な冶金工場の一つであった。それは、革命以前には鉄道資材を製作しており、1936年7月以後には軍需資材を生産した<sup>3)</sup>。ヒロナ社のCNTが支配する工場評議会によるバルセロナのCNT冶金組合への報告は、次のように断言した。1936年7月19日以前に原価が3万1,500ペセタであったが、10万5千ペセタに増加した。退職者全員のための諸費用は、7月19日以前の688ペセタから7,915ペセタに増加した。事故については950ペセタから5,719ペセタに増加した。病人については0から3,348ペセタに増加した。週給総額は、9万ペセタから21万ペセタにはね上がったのである。これらのすべての費用増加とともに「いっそうの生産の強化」が期待され、必要とされた。しかしながら、諸手当が大いに改善され、革命前の総数1万3千人から1万8千人へと労働者数が増加したにもかかわらず、生産が実際には低下したと、工場評議会は言明した。

ヒロナ工場評議会は、すでに週8時間の追加が予定されていたので、労働日の延長がこの問題を解決するだろうとは、信じなかった。追加時間は、増産に失敗しただけでなく、生産低下をとめることにも成功しなかったのである。このようにして、人員の38%増、諸手当の233%増、週給の133%増にもかかわらず、生産は31%低下した。同評議会は、この状態を正すために一定の「实际的」措置を示唆した。すなわち「完成された生産にみあうことができる戦時特別手当を制定すること [原文イタリック体]」であった。ヒロナの経営者側によれば、賃金が増加して、最低生産水準の設定が失敗していたので、他のどんな解決も可能ではなかった。同評議会は、特別手当を制定して、その生産委員会と技師をつうじて「厳格に管理すること」に着手するための認可を冶金組合に求めた。「全労働の価格が管理する人々と、実行する人々によって同意される」から、評議会の提案が「搾取の旧時代」への復帰を意味することにはならないと、評議会は言明した。労働が優れた労働者たちは、報われなければならない。

3) 鉄鋼・冶金産業の経済会議が提出した報告。鉄道資材会社が提出した報告, 1186, A S.

そうでないならば、イニシアチブが妨げられるだろうと、同委員会は論じた。

CNT冶金組合の行政委員会がヒロナ社での「異常事態」を調査するために派遣した委員会は、ヒロナ工場評議会の諸困難を確認した。調査員たちが報告したのは、18ペセタを受け取る労働者が30個を生産するが、5ペセタしか受け取らない見習工が同じ時間内に80個生産するということであった。同委員会によれば、労働者たち自身は、出来高払い仕事のシステムを確立することで工場評議会と意見が一致していた。生産奨励金の新システムは、「基本的に、……われわれのもっとも奥深い確信と」食い違っていると、調査委員会は結論を下した。その理由は、CNTが出来高払い仕事に反対してつねに戦っていたからであった。しかしそれでも、労働者たちは、自分たちの「利己的本能」に夢中にさせられ、調査委員会が主張するには、共産党とUGTの扇動者によって労働者はそそのかされていた。ヒロナ社は、生産上の緊急の必要が「われわれの平等と自由の思想」と矛盾する最後の事例とはならないだろうと、調査委員会は沈みがちに断言した。調査委員会は、金銭的奨励のない生産を拒絶した「[階級-]的自覚のないかつ無責任な」労働者たちを非難し、「[階級-]的自覚のある労働者たち」が同工場で少数派だから、ヒロナ評議会が出来高払い仕事を確立したのは正当であると判断した。

新聞であまり触れられなかったとはいえ、ヒロナ社の事例はCNT内部において劇的な論争を引き起こした。1937年5月27日、冶金組合の役員会で、会長ルビオは、内戦と革命のなかで労働者は疲労しつくすまで働かねばならないと、言明した<sup>4)</sup>。著名な闘士ゴメスは異議をとなえた。すなわち、彼はヒロナ社での週40時間労働を支持して、追加時間を拒絶した。6月1日、別の集会でルビオ会長は、生産者たちが革命の間中、革命を楽しむことができないだろうと述べた。彼はヒロナでの週40時間労働の支持者を非難して、軍需産業でのもっと長い労働日を支持する説を展開した。ルビオによれば、ヒロナでの週40時間労働の支持者たちは、「スト破りであって、自分たちの胃袋だけを考えて、それ以外になにも考えていない」のであった。週40時間労働の擁護者であるゴメス

4) 以下の一節はCNT冶金組合の議事録, 1179, AS による。

## 労働者の抵抗

は、抗議して辞職した。彼は、自分がヒロナの労働者たちの中に不満を見たのであり、彼らが無関心や、肉体的、精神的疲労のために生産することができないのだと断言した。しかしそれでも、ゴメスによれば労働者たちはいぜんとして犠牲を払いつつあった。彼は、一定の特権をもった人々が月あたり数千ペセタを今でも受け取っていると抗議した。バルセロナの酒場はあいかわらず満員であり、ランプラス通り（中心街）は人ごみで雑踏して、「何百万という兵役忌避者や怠け者」が市中を徘徊しつつあった。彼は、このような悪弊をやめさせる活動をCNTに要請した。もしCNTが仮病で仕事を怠ける者を就労させ、ヒロナでの週40時間労働を認めるならば、これらの疑いもなく「[階級-]の自覚のない労働者たちは、自分たちの利益を維持するために、革命を熱烈に防衛するはずだ。ゴメスと組合会長との論争は、ヒロナ社での労働者たちの態度を批判するとともに、CNTの革命に敵対する諸政党のいわゆる共謀を非難するという妥協に終わった。CNTは、ゴメスに彼の態度を改め組合に加入することを要求し、ルビオに会長として留任することを要請した。CNTの決議は、「社会主義化」、すなわち企業集中させられた会社や集産企業体をCNT組合が管理することは、「わが社会的・経済的成果の救済」であるだろうと、結論を下した。

それでもなお、その他の産業における類似の諸問題——CNTによって管理されていようと、UGTによって管理されていようと——は、共産党の扇動者にもUGTの扇動者にも低い生産高と生産性に対して主要な責任がないことを示した。積荷人支部のあるCNT闘士は、「生産が当然そうあるべきものの50%であった」ことを嘆き、支部が生産高を改善するための十分な強制力をもっていないと不平を言った<sup>5)</sup>。数ヵ月間、ゆっくりした作業速度は腐りやすい果実に損害を与えつづけたので、闘士たちは、「組合と革命の精神」が欠けていると一般組合員を批判した。UGT鉄道役員の私的な会合で、ある闘士は、土曜日を除く週48時間労働がバルセロナ郊外、サン・アンドレの支部で実施されているが、しかし「修理された機械数は革命前よりも少ない」と主張した<sup>6)</sup>。

5) 集産化された駅支部、1936年11月29日と1937年1月13日、1404, A S。

6) 国有鉄道組合、1937年1月23日、1482, A S。

革命前に存在した1日6時間労働を復活させようとしたある事務労働者の請願は、最後には撤回されたが、共産党の士気をくじいた<sup>7)</sup>。このようにして、ヒロナ社のCNT冶金組合の宣言——それはその生産上の諸問題を共産党のせいにした——は、複雑な産業・社会上の諸困難を、むしろ単純な政治的レベルに還元した。自主管理論が導入した産業上の意思決定過程の諸変更を除いて、CNTもUGTも生産諸力を発展させるための代替的モデルを提供しなかった。組合は、不十分な生産性や労働者の無関心のような産業上の諸問題に直面すると、資本家がやっていたのとちょうど同じように、賃金を生産高に関連づけることを余儀なくされた。

出来高払い仕事についての諸問題は、革命期をつうじて継続した。シャツやニットウェアを製造・販売した450人以上の労働者をもつ仕立て業集産企業体F・ベヒルス・ビダルは、早くも1937年2月に、全従業員を刺激するために精巧に仕上げられた報奨制度を課した<sup>8)</sup>。1937年10月、アレマニ社——これはパントツその他の品物について大量注文を受けていた——は、出来高払いの賃金で下請契約を結んだ<sup>9)</sup>。1938年5月、バルセロナの鉄道労働者は、出来高払い仕事のほぼ全面的回復を知らされた。

支配人の命令には従わなければならない。

労働者は、出来高当りの合理的な賃金を受け取るだろう。労働者は、協働の基本的ルールを忘れてはならないし、経営者側をだまそうと試みてはならない。

完了作業表は……月ごとに提出されなければならないし、作業表には先行の月々の完了作業で獲得した成果と今月の成果を比較し、作業の生産高と変化の正当なことを証明する報告が添付されていなければならない<sup>10)</sup>。

7) PSUC, 8部, 1937年7月22日, 1122, AS。

8) F・ベヒルス・ビダル, 1937年2月23日, 1099, AS。

9) 1937年10月26日, 1219, AS。

10) 国有鉄道網, 物資と牽引業務, 東部, 1938年5月, 1043, AS (原典の強調)。



## 労働者の抵抗

建設産業では、CNT建設組合の技術＝管理評議会は、1937年8月にアナクロサンディカリスト的な給与準化の改訂を提案した<sup>11)</sup>。同評議会は、次のようなジレンマを提起した。我々が労働規律を回復させ、統一賃金を廃止するかまたは、我々が悲劇に遭遇するか。同評議会は、労働者たちのなかにブルジョアの諸影響を認め、技術者や専門家に対する報奨金の回復を要求した。さらに、評議会は、「もうかる（賃貸しできる）仕事」だけが請け負われるべきだと勧告した。すなわち、「大衆は道徳的に再教育されなければならない」、そして彼らの仕事は努力と質に応じて報酬を与えられなければならない。1937年7月、バルセロナのCNT－UGT建設合同による共同宣言は、賃金が生産に結びつけられるべきである点で意見が一致した。すなわち、「同志による最低限度〔生産高〕の不履行の場合には、彼は罰則を適用され、しかも自分の過ちを繰り返すならば追放されるだろう<sup>12)</sup>。」CNT－UGTの報告は、風紀を向上させ、生産性を増進させるためのプロパガンダはもちろん、生産高のグラフを掲示することを勧告した。CNT－UGTの報告は、低生産高の原因が建設計画終了後に解雇されるのではないかという労働者の懸念にあることが多いと断定した。

公的にも私的にも、UGTは、賃金が生産高に結びつけられるべきで、制裁が違反者に課されなければならないと提唱した。UGTれんが職人組合は、1937年11月20日に、建設合同内での賃金論争がストライキやサボタージュをさえもたらしたと報告した。れんが職人組合はまた、その他の労働者が週当り100ペセタを受け取っていないので、作業しようとしぬことにも言及した。れんが職人組合は、これらの労働者の態度を、「これらの大事な時期に、破滅を招くし、ふさわしくない」態度であると呼んだ<sup>13)</sup>。12月15日に、れんが職人組合は、低賃金労働者が賃金の平等化を求めていることや、どのようにして最低限の生産高を確立するかをCNTと討議しつつあると、述べた。1938年2月1日、UGTは、組合員に戦時中に諸要求をするなどと言って、そして労働者たちにもつ

11) *Boletín del Sindicato de la industria de la edificación, madera y decoración*, 10 agosto 1937.

12) CNT＝UGTの共同宣言, *UGT Edificación*, 15 agosto 1937.

13) UGT委員会の議事録, レンガ職人組合, 1937年11月20日, 1051, A S.

と働けと厳励した<sup>14)</sup>。

建設産業における闘争は、一般組合員が革命前に行ったように、賃金要求をしつこく主張しつづけていることを暴露した。戦時インフレは、労働者の賃金要求を確実に増大させた。卸売物価が戦争をつうじて2倍以上に騰貴したからである<sup>15)</sup>。一定の集産企業体や産業は、インフレ経済から利益を得ていたのだ。建設合同が不平をいったとしても、煉瓦、セメントおよび運輸会社は過大な請求をしていったので、建設合同は、すべての作業が正常に進行することや、物価が正常な生産高に一致することの保証を要求した<sup>16)</sup>。とはいえ、大部分の労働者は物価上昇に苦しみられていた。1936年末と1937年初めに、女性たちはパンの不足に反対してデモ行進をした。その他のデモの行進者たちは、貯蔵食糧品の人民的押収というバルセロナの伝統を継続した。1937年5月6日、「女性の大グループがバルセロナの港を襲い、そこで彼女らはオレンジを満載した多くの有蓋貨車から略奪した<sup>17)</sup>。」さらに、基本的な食糧は配給されて、世帯主たちは長蛇の列をつくって時間をついやすのを余儀なくされた。1938年までに、ミルク、コーヒー、砂糖および煙草は供給不足であった。餓死者は、1936年には皆無であり、1937年にはわずか9人と報じられたが、しかし1938年にはその数は286人に増加した<sup>18)</sup>。企業や組合は労働者の時間と金を節約するために協同組合を設立したり、あるいは直営店を継続した。しかしそれでも、たんに肉体的または経済的欲求にもとづくだけの賃金闘争の説明では、不適切である。どんな分析も、集産化され管理された企業の労働者たちと、管理者たちと

14) *UGT Edificación*, 1 febrero 1938.

15) Josep Maria Bricall, *Política econòmica de la Generalitat (1936-1939)*, (Barcelona, 1978-1979), 1:101-18.

16) *Hoy*, enero 1938.

17) *Solidaridad Obrera*, 7 mayo 1937; 密輸についての通常裁判所, 1336, A S. 女性のデモ行進については、Enric Ucelay Da Cal, *La Catalunya populista: Imatge, Cultura i política en l'etapa republicana, 1936-1939* (Barcelona, 1982), 309-23; Temma Kaplan, "Female Consciousness and Collective Action: The Case of Barcelona, 1910-1918," *Signs* 7, no.3 (Spring 1982) :548-65 を参照。

18) *Estadística: Resúmenes demográficos de la ciudad de Barcelona, 1936-1939*, p.22.

の間の問題をはらんだ社会関係の検討を含まなければならない。普通の場合、技術者または組合闘士であるこれらの新しい産業支配人たちは、戦争と革命の困難な時期をつうじて賃上げ要求をしないように一般組合員にたえず懇願していったが、しかし、もっと多くの作業と犠牲を求める彼らの懇請は、さまざまな産業部門においてしばしば無視された。

たとえばガス・電気管理委員会のCNTとUGTの委員たちは、革命初期と、1937年メーデーのずっと以前に、重大な問題に直面した。1936年12月3日、この産業の一般組合員労働者は、年末ボーナスを請求するためにCNT-UGT共同集会を要求する署名を集め始めた<sup>19)</sup>。これに対して管理委員会は怒りで応えた。ある委員は、その請願書を「反革命的かつファシスト的」とみなして、署名に加わった人々が拘留されることを求めた。UGTとCNTの委員会メンバーは一様に、提起された集会が年間ボーナスを要求するだけでなく、労働者、技術者、および管理者間の給与格差という紛糾させる恐れがある問題を提起するかも知れないことを、危惧した。管理委員会のある委員は、「組合は、大衆の熱望を指導し、一定の方向に向けるために存在している」と、言明した。他の委員たちは、集会の開催が万難を排して避けられねばならないと、結論を下した。若干の委員は、集会において、もっと多くのかねを要求している請願書に署名した300人が、もう一方の2,000人、あるいは4,000人さえもの労働者と容易に結びつくことができるのを懸念した。あるガルシアという人物は、「われわれが大衆に対してまったく権威をもっていないか、あるいはわれわれが大衆に権威を押しつけるかのどちらかだ」と述べた。委員会の会議は、集会を避けるためにボーナスを支払うことで最終的に合意した。委員たちは、部外者と会議について話し合わないよう要請された。なぜなら、委員会が請願書に手をつけ、それを扇動した者たちに懲戒措置をとるために、その者たちを知ろうとしたからである。

同様に劇的な討議はクロスの集産企業体で起こった。この集産企業体の雑誌

---

19) この一節は、労働者管理中央委員会の議事録による、181-82, A S. Walther L. Bernecker, *Colectividades y revolución social: El anarquismo en la guerra civil española, 1936-1939*, trans. Gustau Muñoz (Barcelona, 1982), p.363 を参照。

である『シンテシス』は、賃上げや休暇についての要求を延期するように、しばしば労働者に語っていた。労働者がすべて、『シンテシス』の勧告に従ったのではなかった。1937年6月30日、同集産企業体とその連合組合——14のさまざまなUGTやCNTの組合代表とならんで、アリカンテ、レリダ、バレンシア、およびバルセロナにある集産企業体の事務所や工場の代表——は、CNTやUGTの海運組合の船員や船舶技師からの請願書を討議するためにバルセロナで会合した。労働者たちは、1935年11月から1936年7月19日まで、クロス社のために行った超過勤務時間と、日曜や休暇の労働に対する未払い賃金を要求した<sup>20)</sup>。別の言い方をすると、船員たちはクロスが集産化される以前になされた労働に対する未払い賃金を求めた。化学産業のCNTとUGTの全国連盟は船員たちの要求に反対したが、しかし、多くの他の船員が未払い賃金を受け取っていたので、妥協を望んだ。他の代表は、戦争の必要と集産企業体そのものの必要のために、妥協に抵抗した。

会議をつうじて、長い議論で欲求不満にされたある船員代表が、会議が結論に達するのを急いでいないとしても、船員たちが急いでいる、つまり一隻の船がまもなく出航の予定であると述べたとき、緊張が一気に高まった。代表たちはその言明を脅迫と解したので、会議の議長が、この会議は強制されることができないと警告した。その他の代表は、ストライキで脅迫したことや、彼らの「無規律」について、船員たちを批判した。アリカンテの代表は、自分の工場の労働者たちが飢えているのに、それでも集産企業体の利益のために犠牲を払ったことに言及した。バダロナ代表は船員の要求に抗議して、すべての協定が多数票によって採択されたので、彼らが集産企業体を「ブルジョアジー」のように扱ってはならないと論じた。彼は、船員代表がストライキによる脅迫をやめるまで、どんな合意も達せられることができないだろうと主張した。UGT海運代表は、自分がどんなストライキの脅威にも気づいていないと答えた。CNTで彼と同じ立場にある人物は、海で自分たちの生命を賭けようとする船員が求めているのは公正かつ平等な待遇だけであると断言した。もう一人の参加

20) 次の二つの節は、クロスの集会の議事録による。1421, AS。

## 労働者の抵抗

者は、集産企業体がその船員たちに最高の考慮をつねに払ってきたこと、しかし、時には船員は要求が満たされないと出航を拒絶したことや、工場評議会が合意するのを余儀なくされたこと、応酬した。最後に、会議は、経済状況が許すまで、未払い賃金問題にたいする解決を延期するという提案を採択した。その他の集産企業体では、労働者のすぐれた記憶力は、暗黒の2年間をつうじて、あるいは早くも1919年に解雇された人々に対する再雇用と未払い賃金について決定しなければならない新しい経営者に問題を提起した。

クロスの集産企業体の組合と工場の代表のもう一つの総会は、バルセロナ工場の労働者のための15%賃上げの問題を討議した。バルセロナの地方CNTとUGTの化学組合は、その労働者の賃金要求をかつて支持していたので、賃上げが認められないならば工場を閉鎖すると脅迫さえしていた。バルセロナ工場の管理者と、その他の工場や組合からの役員は、たとえ正当であろうとも「新経済」と危険にさらす賃金増額に反対するように、バルセロナの組合に勧告した。会議の議長は、バルセロナの労働者が船員と同様に強制的な方法で賃金増加を勝ち取ろうと努めつつあると、言明した。要求をすべき時期ではない、労働者たちは、自分たちが選出した評議会に新しい問題を引き起こしてはならないと、議長は主張した、彼は、自分がほんの一時的な生活費増加を認めることができるだけで、しかし、この譲歩がそれ以上の要求をする権利を意味していないと信じていた。集産企業体の中央本部が賃金増額反対を主張する提案を提出すると、バルセロナ工場の代表は、それなら会議場を去ると脅迫したのである。マドリードの代表は、達成すべき大きな仕事があるときに、「このような実利主義的」論議で時間をむだにするのは恥ずべきであると、応酬した。その後、バルセロナ工場に対する賃上げは、関連工場を除く全員によって投票で否決され、議長は、バルセロナの代表にその戦時義務を思い出させたのである。バルセロナ労働者にたいする賃上げと、船員に対する未払い賃金の問題は、ストライキの脅威や現実のストライキがスペイン革命をつうじて存在していることを証明した。

革命のごく初めから始まった労働者の不変の諸要求は、組合指導者に挫折感を起こさせた。1936年11月、鉄道が雇用した清掃人の作業は、彼らの賃金につ

いての不満を反映していた。UGT評議会の一員によれば、「清掃人は、いつも寝台車を出迎えて、トイレを降ろしていた。いまや多くの場合、彼らはそうしていない<sup>21)</sup>。」彼らやその他の無規律な労働者はチップを受け取っていた。つまり、あれこれの企業では禁止されていた慣例である。コックのような若干の鉄道従業員は、病院列車で働くことに抵抗した。同評議会の委員たちは、全従業員の大部分が「善意」——彼らが救急車で働くことによってかつては証明していたと、委員たちが考えた「善意」——に欠けていると主張した。清掃人たちは、賃金についてしばしば不満をこぼしつづけて、ついに未払い賃金を償われたのである。

合同電力産業のCNT-UGT組合は、より多くの賃金とより少ない時間にたいする要求が「いまは討議されるべきでない」ことに合意したとはいえ、賃金と作業時間表が特権的企業の仲間のもものと等しくするべきと感じている若干のより貧しい会社の労働者と対決しなければならなかった<sup>22)</sup>。彼らが不公正な賃金格づけシステムと考えたものに抵抗するために、電力産業の従業員は、午前の仕事を午後に行う組織的な怠業ストライキに参加したようである<sup>23)</sup>。1937年7月3日、CNT冶金組合の集会で、ある闘士は、「わが同志」に「理想主義者」になって、「実利主義者」になるのをやめるように熱心に説いた。しかし数ヵ月前、冶金組合は、生活費の高騰が賃上げを必要としていると結論を下し、賃上げが「社会不安」を終わらせ、工場内での秩序を維持するかも知れないことを期待していた<sup>24)</sup>。

労働者たちは、時にはボランティアの作業に対する賃金を要求したり、あるいは戦時努力に対する犠牲を拒絶したりした。UGTの衣服組合は、男女4名に軍隊のために衣服を収集するように要請した。ボランティアたちは、自分たちの奉仕に対して報酬が与えられないだろうということを「理解」していなか

21) 寝台車の労働者評議会，1936年11月10日と1937年3月13日，467，A S。

22) 1936年9月29日，182，A S。

23) 1937年8月25日，181，A S。

24) 冶金組合の議事録，1937年7月3日と4月9日，1179，A S。

## 労働者の抵抗

ったので、賃金を要求した<sup>25)</sup>。MZA中央委員会は、フランス国境での石炭積み降ろしに派遣した7人のボランティアを停職させた。彼らは食事についての口論のために自分の部署を放棄したのである<sup>26)</sup>。ある人たちは兵士のために衣服を作ることによって、あるいは負傷者に献金することによって前線のために犠牲を払ったとはいえ、ほかの人たちは戦争のために課税されるのを嫌っていた。CNTグラフィックアート組合は、全員が民兵に5%の献金を支払うのを保証するために、セイクス・イ・バラルの有名な出版社に職員を派遣した。CNTの組合は、その他の非献金者を調査することを約束した<sup>27)</sup>。1937年1月、宝石・貴金属類集産企業体の労働者たちが民兵に賃金の5%を拠出するよう要請されていると知らされると、彼らは「超過勤務を拒絶した<sup>28)</sup>。」同組合は、いささかの賃上げにも応じないことで応えた。

賃金闘争は、労働者の不満の唯一の表明どころではなかった。すなわち、組合は欠勤や遅刻という大問題、つまり労働史上いたるところでさまざまな程度で存在した現象に直面することも余儀なくされた。19世紀には、そのフランスの対応者と同様に、カタルニアの労働者は「聖月曜日」、つまり多くの労働者が各自の日曜日の休みを延長するためにとった非公式かつ非公認の休日の伝統を維持していた。20世紀には、おおむねキリスト教からはなれた反教権主義的なカタルニア労働者階級は、伝統的な週日の宗教的休日を尊重しつづけた。革命の間中、アナクロサンディカリストや共産党の新聞・雑誌は、これらの伝統を労働者が頑として守りつづけることを、しばしば批判した。『ソリダリダド・オブレラ』紙や『シンテシス』誌は、伝統的な宗教的休日の仕事を休む口実であってはならないと宣言した。若干の組合は、週日の祭典の挙行を禁止した。電力産業の地方委員会からの発案は、1936年のクリスマス休暇を禁止したが、

---

25) UGT地方連盟執行委員会、1937年11月27日、501, A S。連盟は給料の半分を支払うことに同意した。

26) 議事録、1937年3月18日、531, A S。

27) 評議会、1936年11月13日と12月8日、1204, A S。

28) 冶金特別組合の議事録、宝石・銀細工・時計部、1937年1月16日、1352, A S。

しかし祝祭日として元日を維持した<sup>29)</sup>。週労働日内の宗教的休日の祭典（観察者は日曜日ミサへのバルセロナ労働者のかなりの出席にまったく言及しなかった）が実行されたことは、欠勤や遅刻とともに、どのように合理化され、または民主化されていようとも、労働者が工場を嫌いつづけていることを示していた。賃労働を回避するこれらの行為は、賃金問題についての闘争がそうであったよりも、スペイン革命の理想に対するもっと深い無関心を暴露していた。

どのように休暇が組織され、賃金を支払われるべきであるか——そして、そうすべきかどうか——ということにかんして、長い熱のはいった論議が起こった<sup>30)</sup>。多くの賃金労働者は、政治・軍事情勢にかかわりなく、1936年と1937年に夏季休暇を逃さないことを決意したようである<sup>31)</sup>。武装蜂起後、数週間してガス・電気産業の管理委員会は、8月15日が休日ではないはずだと布告した。1937年の夏が接近すると、若干の組合は休暇を全面的に禁止した<sup>32)</sup>。多くの集産企業体で、土曜労働はきわめて不人気であった。1937年11月、UGTは、土曜日午後の労働を拒絶した多くの鉄道労働者の無規律を非難した<sup>33)</sup>。CNTのある組合は、10日の賃金と、重要なことには、15日間の休暇をとりあげることによって、土曜労働をたえず拒絶してきた3人の積み込み人夫を処罰した<sup>34)</sup>。1人の闘士が、窃盗に対する処罰は6土曜日の就労であるべきだとつけ加えた。CNT事務所で働く女性たちは、CNTのスローガン、つまり「戦時には一日の休日もなし」を無視したので、闘士たちは、土曜労働を拒絶した女性タイピストに対して、懲戒行為をとるのも止むを得ないと感じた。彼らは、この違反

29) 1936年12月12日, 182, A S.

30) 議事録, 1936年11月29日, 1404, A S.

31) Anna Monjo y Carne Vega, *Els treballadors i la guerra civil* (Barcelona, 1986), pp.64, 170.

32) 報告, 1936年8月14日, 182, A S. 配給評議会, CNT, 1937年6月15日, 1446, A S.

33) MZ Aの労働者評議会からの手紙, UGT国有鉄道組合, 1937年11月24日, 467, A S.

34) 集会, 1937年1月13日, および議事録, 1937年7月24日, 1404, A S. 集会は, 3名の労働者が罰金を支払えば休暇を確保することに同意した。



## 労働者の抵抗

者が懲戒されないならば、「多くの〔女性〕同志が日曜労働を怠るだろう」と恐れていた<sup>35)</sup>。1937年5月の有名な日々は、CNTやUGTが労働への即時復帰を精力的にキャンペーンする前に、ある程度の賃金労働者に予期しない休暇を提供した。

病気は失われた労働日数を増やした。建設では、多くの同志がしばしば「病気」であった。CNT石工技術委員会は、「一定の労働者たちの無責任」に言及した。「われわれは仮病をつかい、働かないで、かくしてわが集産企業体に重大な経済的損失を引き起こした人々に言及している。」<sup>36)</sup>同委員会は、病欠中の賃金を得るためのあらゆる種類の戦略を考え出した「恥知らずな労働者たちの抜け目のなさ」と不道徳に驚いた。委員会は、てんかん患者と認定された労働者が、庭いじり中に、技術委員会の委員たちの来訪で不意をつかれた一つの実例を選び出した。これやその他のタイプの欺瞞は、委員会の社会諸政策を「深刻に脅かした」。それは、「乱用を徹底的に根絶するために」組合代表による「十字軍」を必要とした。もう一つの技術委員会、つまりCNT木工技術委員会は、病欠中の賃金を獲得するために、委員会の医者の一を訪れることを労働者に要求した疾病委員会を設置した。それはまた乱用を警戒するように「組合代表と労働者一般」に警告もした。共済組合のCNTは自分でつけた傷の慣例を続けながら人さし指に感染伝染病をひき起こした一人の木工をつかまえた。1937年11月、UGTれんが職人組合の闘士は、人員の超過、信用の不足、および輸送の困難に加えて、建設合同の「失敗」にたいする重要な理由が、「病人に支払われるペセタの額の過剰」であると、主張した<sup>37)</sup>。バルセロナのUGT連合執行委員会は、これらの調査結果を次のように確認した。

---

35) 地域委員会、防衛部、1938年7月17日、1049, A S。

36) 以下の報告は、*Boletín del Sindicato de la industria de la edificación, madera y decoración*, 10 noviembre 1937 による。

37) 衛生、1938年2月12日、1203, A S。UGT委員会の議事録、れんが職人組合、評議会、1937年11月7日、1051, A S。

工場評議会が厳格な管理を設けなかったので、疾病にかんする多くの誤用 [があった]。病気とみなされた人がしばしば自分の委員会の委員と親密な関係をもっていたので、管理が困難である。しかしながら、もし労働者が企業によって保険をかけられ、企業が状況を注意深く観察していたならば、この欺瞞は避けられたかも知れない。この点について保険組合の同志と協議することが合意された<sup>38)</sup>。

積荷人や荷卸人のあいだでは、事故の犠牲者による乱用が労働者共済組合にたいするより大きな支払い額となってしまった。ほぼ一年間入院していたある積荷人は、自分の年金からかなりの金額を貯蓄することができた<sup>39)</sup>。集会は、肉体的に能力のある労働者たちが労働するのを保証するための措置をとることを、管理委員会に勧告した。同委員会の有効性は疑問であった。それというも、数ヵ月後にある闘士が、数日間欠勤したが給料を取りに土曜日に出勤した労働者たちを非難したからである。1936年12月、板金工組合の著名な闘士は、「疾病と [作業] 日程にかんして、ほとんどすべての作業場で行なわれた不正常」に不平を述べた。1937年1月、もう一人の板金工は、いくつかの作業場における「放縦」を次のように言及した。「病気ではなくて自分の都合だけで一日か半日の欠勤をする労働者が多い<sup>40)</sup>。」1937年2月、CNT冶金組合は、若干の労働者が労働災害を利用しつつあると、素直に言明した<sup>41)</sup>。

これと関連して、歴史家たちが無視した医師は、スペイン革命の重要人物となった。初期数ヵ月間、若干の委員会は、個別会社の医師を取り替えたが、けっして医師の監督的役割を排除しなかった。電気・ガス産業の革命的支配人た

38) UGT地方連盟の執行委員会, 1937年9月29日, 501。1936年11月に、人民裁判所の検察官アドルフォ・ブエソは、「保険組合の組合員の大多数がファシストである」ときめつけた (UGT地方連盟, 1936年11月27日, 1311, A S)。

39) 議事録, 1937年6月6日と13日、8月22日、1404, A S。疾病手当は集産企業体や組合によって変化した。

40) 鉄・冶金産業組合, 板金工支部, 総会, 1936年12月25日と1937年1月15日, 1453, A S。

41) 冶金組合の議事録, 1937年2月15日, 1179, A S。

## 労働者の抵抗

ちは、医師組合が全従業員の不信を買った医師を即時免職にすべきであると力説した。免職された医師の後任者は、その他の医師が診察した人々の疾病を確かめるために往診しなければならなかったはずである<sup>42)</sup>。多くの組合と集産企業体は、病気の労働者を診察するために、自分たち自体の医務員の任命権を留保した。ある集産企業体は、労働災害の犠牲者が、企業体の保険会社の医師に直ちに報告することを要求した<sup>43)</sup>。医師たちは、欠勤を許可するだけではなく、患者たちのためにそれほど困難でない仕事を要求する権限をもっていた。医療専門家は、管理委員会その他の団体が、疾病を野放しで認める点で情実の罪があるかどうかを判断するのに役立った。

しかし、医師たちはすべてが革命的美德の模範というわけではなかった。医師のあるグループは軍事的反乱に同情したし、他のグループは自分たちの立場を利用した。診療所のUGTは一連の乱用を報告した。すなわち、病人がひどく取り扱われ、看護婦が「抑圧」され、患者に予定されたミルクが他の人々によって消費され、公用車が個人的な目的のために利用された<sup>44)</sup>。鉄道労働者のあいだで、負傷者数が減少したとはいえ、彼らの補償金は増加した。組合代表は、「全従業員のあいだでの犠牲的精神の欠如、しかしよりいっそう自分の義務を遂行していない医師たちの無関心についてのこの変則」を非難した。「多くの場合、負傷者は完全な週末休暇を受け取った<sup>45)</sup>。」いくつかの乱用をやめさせるために、闘士たち全員は、病人の監督を増加することを決定した。共産党細胞は、医師たちがもっと厳格にならないと、解雇されるだろうと警告することに合意した。細胞はさらに、全労働者に知られていない医師だけが「疑わしい病人」を診断する資格があると、決定した。

煙草やアルコール、つまり社会主義的な現実主義的ポスターのなかでの非難の主題は、労働時間の損失の一因となっていた。革命の初期に、バルセロナの

---

42) 中央委員会、1936年8月22日、182、A S。管理委員会の議事録を参照。1937年3月19日、467、A S。

43) 職務規程、エウダルド・ペラモン、1938年9月1日、1219、A S。

44) 地方連盟の評議会、1937年11月4日、501、A S。

45) 以下の報告は、P SUC、8部、(7月か?) 1937、1122、A Sによる。

新聞『ラ・バンガエルディア』の従業員と警備員は、就労時間中に飲酒し、賭博するためによく集まったものだ。CNT 冶金建設組合出身の一闘士は、労働者たちが喫煙するために仕事を放棄すると不平を言った。多くの警告の後、中央委員会は、仕事にしばしば飲酒した荷物運搬人を、別のもっときついポストに2ヵ月間配転することによって処罰した<sup>46)</sup>。

戦争と革命の混乱状態は、欠勤のもっともな口実を提供することができた。1936年6月の「諸事件」が仕事に復帰するのを妨げたと労働者が主張したとき、管理委員会は懐疑的となった。『ソリダリダド・オブレラ』紙の経営陣は、CNT 地方委員会の許可がないと、欠勤者たちは賃金を支払われないだろうと、警告した。電力産業の経営委員会は、「無数の不誠実な事例」の検討を計画した<sup>47)</sup>。電力会社が雇用した民兵たちは、新聞で掲載された告示を無視したのである。この告示は、自分たちの仕事に復帰するように民兵たちに求めた。さらに、闘士たちは、多くの民兵がいぜんとして後方にいることに不平をこぼした。鉄道の支配人たちは、組合委員会が非公認の欠勤と判断したことを理由に、多くの労働者を解雇した。今度は、労働者たちが自分たちの委員会を信用しなくなって、委員会が賃金コストを低下させる方法として彼らが軍隊に入隊するのを奨励しようとしたと、労働者たちは疑問を抱いた<sup>48)</sup>。

欠勤に加えて、サボタージュや窃盗——生産における協力についての自由論者的、または共産主義的な原則からの大きな距離を意味している——は、スペイン革命の間中つづいていた。サボタージュは、次のようにしばしば最も広い意味で定義された。

---

46) 評議会、1936年10月2日、1204, A S。CNTの冶金製造産業の評議会と闘士たちの

議事録、1937年12月7日、921, A S。議事録, MZ A, 1937年4月9日, 531, A S。

47) 評議会、1936年10月23日、1204, A S ; 1936年11月12日と12月12日, 182, A S。

48) 総会議事録、1937年3月19日、467, A S。総会議事録、1937年3月16日, 531, A S。

## 労働者の抵抗

終業前に職場を離れること……。激しく不平をとなえること……。理由なく休暇をとること。仕事を完了するともっと仕事をしようとはしないこと。不作法に顧客を待ち受けること。就業時間中に飲食すること。しゃべること。他の労働者の注意をそらすこと……。電話をかけること、または緊急でない電話の伝言を受け取ること。これらの違反行為を犯す労働者たちは、一日の賃金を失うであろう<sup>49)</sup>。

マドリード出身の著名なCNTのジャーナリストは、この状態を次のように評価した。

諸君は、どのようにして物品の価値を測定すべきかを知らないで、不注意にも物品が浪費されるのを許している同志たちを見出すことができる……。他の人たちは、反ファシズムの大義に目ざめ、その大義に手をかすことができるのに、保証された賃金のために使用者のサボタージュを大目に見ているのは犯罪的である。彼らは、自分たちが毎週土曜日に賃金を得るかぎり、機械が作動しているか、していないかということに注意を払っていない。彼らは、食べることができるならば、他の人々が必需品を欠いているとしても、全く気にしないのである。

ある者は、彼らが産業をのっとして、その資本で生計を立てるとき、同様に下手に行動する。失業した同志がまったくないように、他の者は週労働時間を低減する。彼は、ことによると一週につき、まる一日だけ働いて、しかもその賃金を維持するためにコストを7倍、あるいは10倍に引き上げるかも知れない<sup>50)</sup>。

ガソリンや自動車部品の不足を考慮に入れるならば、不必要な小旅行のために自動車を利用する地方委員会委員はサボタージュの罪を犯しており、解雇されるかも知れないと、中央委員会は非難した<sup>51)</sup>。CNT鉄鋼評議会は、合理化

49) 職務規程案、仕立て業カサロモーナ（日付なし）、1219、A S。

50) J. García Pradas, *Antifascismo Proletario: Tesis, ambiente, táctica* (Madrid, 1938?), pp.129-30.

51) 1937年1月14日、181、A S。

されたガラス工場集産企業体を「サボタージュ」した4人の労働者を追放した<sup>52)</sup>。4人は、「絶対必要な」地位を獲得していたが、夜勤中に眠ってしまった。彼らの職長は仕事中に昼寝をすることを熟練工たちに認めていたので、彼も「経済や戦争〔努力〕に重大な損害」を許したことで解雇された。バダロナのCNT冶金組合——そこでは、われわれが見てきたように、1930年代初頭には闘志がとくに強烈であった——は、サボタージュ実行者についての特殊な問題を抱えており、その明白な賛同なしに、バダロナの冶金業者に仕事を与えないように、そのバルセロナのCNTに要請した。

1938年3月17日、集産企業体M. E. Y. D. O. のCNT代表は、サボタージュが集産企業体の生命を危険にさらしつつあると、CNT冶金組合の機械装置部門に報告した<sup>53)</sup>。長期にわたって、5万ないし6万ペセタと評価された膨大な数の部品や道具が消失した。同集産企業体は、これらの窃盗が自分たち自身から盗むのに等しいことを、その労働者たちに納得させようと試みた。説得は失敗におわった。窃盗がひきつづき増加さえしたからである。結果として、同集産企業体は、盗まれた備品が再び現われるまで、労働者たちを一時解雇にした。仕事のない（しかも明らかに賃金のない）2日間が経過してから、数人の労働者は自分たち自身のイニシアチブで、ファン・センデラという人物の家に行き、盗まれた備品の多くを発見した。告発されたセンデラは、集産企業体から解雇された。

盗みの程度や、ふえ方ははっきり確認できないが、その他の工場や集産企業体でも報じられた。軽窃盗罪は、積荷人のあいだで蔓延していた。積荷人たちは卵や穀物を盗んでいた<sup>54)</sup>。盗んだ生産物を各自のカバンに入れて、労働者たちは家まで一日に何回かの小旅行をした。同僚や管理人がどんなこそ泥をも告発しないという点まで、彼らを脅したのは明白である。ある闘士は、「就業時間中、多くの同志は腰を下ろし、煙草を吸い、彼らがするべきであるように行

52) 評議会に対して、1938年6月25日、1084, A S. 2通の手紙をも参照、1938年1月20日、1084, A S.

53) この節は、集産企業体M・E・Y・D・Oからの手紙による、854, A S.

54) 以下の報告は、集会議事録による、1937年7月24日、1404, A S.

動していない。この点が委員会に指摘されると、彼らは委員会の同志に対して傲慢な態度を示した」と、不平をこぼした。集会は盗みの初犯にたいして100ペセタの罰金を科し、常習犯を追放することを票決した。革命の初期数週間には、市場労働者の組合は、その無職の組合員を警備員として雇用することによって、窃盗も失業も同時に減少させようと努めた<sup>55)</sup>。

若干の組合闘士や集産企業体の役員は、基金の横領や濫用で告発さえされた<sup>56)</sup>。適任の幹部や献身的な組合闘士の欠如は、ある場合には日和見主義者を助長したかも知れない。カステリヨンの地方CNT内で重要な地位に素速く昇進していた保守的な急進党のあるもと黨員は、バルセロナへ逃れた。カステリヨンの組合は、彼が難民用に予定された基金をもって逃げ出しただけでなく、女性の同志も一緒に連れ出したことをも告発した<sup>57)</sup>。あるCNTの冶金組合員は、組合費を自分自身のポケットへ流用したと疑われた<sup>58)</sup>。アナルコサンディカリストの情報源は、繊維組合に属する基金集めについての汚職を報じた<sup>59)</sup>。

もっとも劇的な窃盗事件が電力産業で発生した<sup>60)</sup>。ガス・電気委員会は、石炭の買い付けに予定されたと思われる秘密の——しかも非合法の——銀行勘定をパリにもっていた。1936年に、カタルニア自治政府と共謀して、あるいは政府の承知の上で多分活動していた経営委員会は、パリのある銀行に基金を預金する権限を代表に委任した。1937年9月、同経営委員会は、フランすべてをペセタと換金するためにパリに戻ることを新しい代表団に指示した。いく人かの同僚は、彼ら自身の名義で銀行勘定を開設していた最初の代表団の——1人はCNTの、もう1人はUGTの——2人のメンバーを同伴させた。2人の男性の配偶者たちがフランスの首都で彼らに加わったとき、代表団のほかのメン

55) カタルニア自衛団の集団, 1936年9月20日, 1170, A S.

56) CNT冶金製造業の議事録, 1937年12月7日, 921; UGT電話評議会, 1937年1月9日, 1170, A S. *Solidaridad Obrera*, 30 diciembre 1937.

57) 地方連盟, 1938年4月4日, 1084, A S.

58) 同僚, 1938年2月11日, 1084, A S. 闘士たちは、告発された人物を追放する提案を却下したが、組合事務所においておくことは拒否した。

59) *Solidaridad Obrera*, 3 febrero 1937.

60) 以下の報告は、181, A Sにある一連の記録類にもとづいている。

バーのなかに疑惑が生じた。100万フラン以上もの大金に魅了されて、2人組は横領者になっていた。彼らは、女と金とともに失踪した。

卑俗な読者なら、高い地位にある人のこの明らかな腐敗によって好奇心を刺激されるだろう。とはいえわれわれの目的にとって、この物語——想像力に富むフランコ主義者によってでっちあげられたかどうかが怪しまれているほどに、この事件は革命家の信用を傷つけた——は、一定の産業で権限と責任のある地位に適任の献身的なCNTやUGTの職員が不足していることを証明していた。このスキャンダルは、1937年10月におけるカタルニャ自治政府の直接的介入と、それにつづく産業の自律性の終焉を引き起こした。真に献身的なCNTやUGTの闘士たちは、彼らの指導者のあいだでのこのような汚職事件が、一般組合員の士気をくじき、大義のために熱心に働き、断固として戦うというどんな訴えに対しても、彼らをしてますます抵抗させ得るに過ぎないことを知っていた。このような状況のもとで、冷笑はきわめて伝染しやすい病弊であった。もちろん、その他の種類の多くの実例があった。つまり、戦線や家庭で進んで犠牲を払った数えきれない実例を示した献身的な活動家たち。たとえば、「下劣な盗賊」によって殺害されたCNT木工の会計係は、集産共同体の利益を守るために自分の生命を捧げたことで称賛された<sup>61)</sup>。

ちょっとした意外な成り行きで、バルセロナのある農業集産企業体は、子供を殺してしまった警備員の一人を守ることを、止むを得ないと感じた。この集産企業体は、十分武装された近隣の20ないし30人のギャングたちが子供たち——そのいく人かは難民であった——を、ギャングが当時闇市場で売っていた産物を盗ませるために雇っていると、説明した。人の労働をくすねることを地方の「ごくつぶしども」に許さないという集産企業体の決定は、不幸な「事故」という結果になった<sup>62)</sup>。CNTは、「無知なトラブルメーカーたち」によるこそ泥が、全市をつうじて(24,700エーカーにたいして)1,000ヘクタールを所有するバルセロナ農業集産企業体のもっとも重大な問題であると、非難した<sup>63)</sup>。

61) 全員に対して、1938年9月30日、1084, A S。

62) 協同部、パリアダ・プラト・ベルメルへの報告、CNT、1938年7月11日、830, A S。

63) *Solidaridad Obrera*, 24 jun io 1938.



## 労働者の抵抗

闘士たちは、しばしば盗み、浪費、およびその他の形態のサボタージュや不服従をファシスト的とみなし、それによってまた基本的に社会的かつ産業的問題を、彼らが抑圧をつうじてより簡単に解決しうる政治的レベルに還元した。

こそ泥や福祉かせぎが、バルセロナ——そこではスペインの他の諸地方からの数千の失業難民が集まっていた——で大問題となったことは、さして驚くにあたらない。1938年7月、同市はほぼ2万2,000人の難民を抱えていた<sup>64)</sup>。共産党の活動家は、若干の雇用された難民が福祉関係の職員をだまして、集産企業体の無料食堂で食事していると、不平をこぼした<sup>65)</sup>。P S U Cの闘士たちは、当局がぺてん師を追放することを要求した。1938年末頃、土地の人と他所者との緊張が増大した。事件——とくに畑からの盗み——は、食糧がほぼすべての人にとってますます乏しくなったので数が増え、カタルニア人は新来者の出現をますますひどくいやがった<sup>66)</sup>。福祉の役人たちは気前よくしようと努めたので、カタルニア工業諸都市における難民人口は、時には、土地の人よりもはるかに規則的に配給を受け取った。しかしながら、一定の諸都市は新来者に予定された配給を土着人口のために吸い上げた<sup>67)</sup>。他所者は腸チフスの流行に苦しみ、それはバルセロナで1936年に144人、1937年に261人、そして1938年に632人の死者をだすに至った<sup>68)</sup>。

難民ほどには深刻でない境遇のなかで、賃金労働者も役人を欺いた。スペイン革命の歴史家たちは、労働者たちが自分自身の利益を増進するためにCNTとUGTとの対立を時には利用して、より少ない労働、より高い賃金、休暇、および仕事の保証をめざす各自の要求に対する支持を一つの組合、次いでもう一つの組合に求めたという事実を、無視してきた。共産党のあるUGT指導者は、CNTとUGTに登録された労働者の割合による工場評議会の任命が、労

---

64) 諮問委員会、1938年7月13日、カタルニア自治政府 277, A S。

65) P S U C, 9 a細胞, 1938年1月7日, 1122, A S。

66) 貧民救助事務所、報告、レウス、1938年10月30日、カタルニア自治政府 277, A S。

67) 委員会、1938年7月27日、カタルニア自治政府 277, A S。

68) *Estadística*, 1936-1939.

働者による組合の変更によって「混乱」と「不安定」を生みだすのを見出した<sup>69)</sup>。1937年1月23日、UGT鉄道組合の非公式会議で、CNTは、土曜就労を要求する両組合による協定を破ることによって、UGT組合員を引きつけようと試みたことで非難された<sup>70)</sup>。あるUGT幹部は、「この時期での怠惰は不合理であり、反革命的である」と主張したが、しかし、その他のUGT活動家たちは、CNTが土曜就労に同意しないならば、自分たちの組合員も働くのを拒絶するだろうと、言い張った。UGTの闘士たちも、不満なUGTの書記を引きつけるための「画策」について、自分たちの競争相手を非難した。CNTは、電話従業員のための労働時間の削減と休暇の増加を主張したと思われる<sup>71)</sup>。

革命の初期には圧倒的にCNTであった電力産業において、UGTは、CNTの提起した48時間ではなく、もっとも短い週36時間労働を主張することによって、支持者を獲得しようと努めた<sup>72)</sup>。この論争は1937年に再燃した。7月に、UGTは、36時間か、あるいは40時間の強化スケジュール——これは最低限の昼休みを意味した——かという問題を提起した。CNTは、正常な週44時間労働を望んだ<sup>73)</sup>。この区別を前提にして、労働者たちは各自の好みに適合した週労働時間を選択し始めた。ある自由論的闘士は、「CNTが徹底的な週36時間労働の確立を提起したならば、われわれが多数派をかちとったのではないかと、諸君は考えないのか。労働者は一般的に自分たちの胃袋をこえて考えはしないのだ」と、非難した。彼は、UGTが週36時間労働の綱領でCNT組合員を引きつけるために、運動を起こしつつあるということの意味していたのであり、「この問題のために、この産業を経営するのは、いまや可能ではない」ということを、信じていたのである。彼が懸念したのは、同志たちが労働日程計画の闘争を知ったとき、前線での士気が阻喪することであった。すなわち、兵士た

69) Joan Fronjosà, *La missió dels treballadors i la dels sindicats en la nova organització industrial* (Barcelona, 1937), p.15; 集会, 1937年10月29日, 1219, A.S. をも参照。

70) 国有鉄道組合, 議事録, 1937年1月23日, 1432, A.S.

71) 地方連盟の評議会, 1937年11月4日, 501, A.S. UGT地方連盟の執行委員会, 1937年7月26日, 501, A.S.

72) 1936年10月5日, 182, A.S.

73) 以下の報告は、1937年7月16日と9月27日の議事録にある, 181, A.S.

ちは、「イギリス人に事態を解決しうるかどうかを知るためにもどってくれと要請するだろう。」多くの労働者は、明らかにより短縮された週労働時間を採用した。CNTの活動家は、UGTガス・電気組合を、政府に同産業の管理権を握らせるのを余儀なくするであろう状態を助長するために、週労働時間に「まったく手を加えないこと」に賛成しているとして非難した<sup>74)</sup>。

1937年10月4日、CNT代表は、「われわれは、労働者たちが拒絶することを、彼らにさせることができない」、しかし、「われわれは、彼らの望むことを与えるならば、虐殺に向かって進みつつある」ことを認めた。経営委員会のある委員は、「労働者たち、つまり疑いもなく、同志たちのこの無規律は、両組合間の意見の相違から生じている」<sup>75)</sup>と、断言した。無規律に怒ったUGTのある支持者は、委員会の指令が守られていないと付け加えて、不服従労働者の追放を勧告した。彼は、CNTの同僚に、CNTが作業計画表を実施することができるかどうかを尋ねた。

残念ながらできないと思う。彼ら〔不服従者たち〕は、いつものように同じ態度を維持するから、彼らは妥協することを望まないだろう。……彼らが建設委員会、部門委員会等々からでてくる協定や指令を無視する場合には、なにを試みても無益である。その指令が一方の組合からでようと、あるいは他方の組合からでようと、彼らは、なにごとにも注意を払わない<sup>76)</sup>。

バルセロナUGTの代表も、「集産企業体の無規律の」増大に危惧を抱いた。この会合は、結論のないまま終わった。

ヒロナ社で、UGT労働者は、週40時間労働の「熱烈な盲目的支持者」であって、CNTの情報筋によれば、彼らは、その指導者がいぜんとして週労働時間の短縮に反対するならば、UGTを見捨てると脅迫した<sup>77)</sup>。CNTの代表の

74) *Solidaridad Obrera*, 24 junio 1937.

75) 一般諮問委員会、特別会議, 181, A S.

76) 諮問委員会の特別会議, 1937年10月4日, 181, A S.

77) CNT冶金組合の議事録, 1937年5月27日と7月14日, 1179, A S.

ひとりは、連合が賃上げをしないと、流通部門の労働者たちが他方の組合に加入するかも知れないと、懸念した。CNT板金組合は、休暇に賃金を払わないと、共産党がその結果としての不人気から利益を得るだろうと、心配した<sup>78)</sup>。数え切れない数の労働者が二つの組合の組合員になったのであり、それは抜け目がないが危険な戦術であった。このような労働者のひとりが管理パトロールによって身元点検をつうじて発見されると、組合の闘士たちは、彼に対して「精力的な行動」をとることを計画した。CNT自動車組合は、両組合に組合員資格をもつゼネラル・モーターズ労働者を追放しようと試みた<sup>79)</sup>。

二つの組合間の緊張は、彼らの日常の協力や、彼らが直面する諸問題の類似性にかかわらず、革命期を通じて持続した。歴史書は、両組織間の政治的およびイデオロギー的な相違を大いに強調してきた。若干の歴史家は、CNTの集産化、または組合管理の政策とは対照的なものとして、産業の国有化、または政府管理にたいするUGTやカタルニア共産党の綱領に焦点をあてた、他の歴史家たちは、選挙への参加や、国家を管理することにたいするUGTや、カタルニア共産党の積極性と対照的に、政治活動や政府責任にたいしてCNTやアナルコサンディカリストが示した賛否両論を指摘した。これらのイデオロギー的および政治的な緊張がどんなに重要であろうとも、経済的管理と産業的管理にたいする日常的な衝突は、少なくとも同様に重要であった。

二つの組合は、新組合員をめざしてたえず張り合っていたのであって、それぞれの支持者は新しい組合員を生み、力量を増大させたのである。加えて、入手できる仕事をめざす競争は猛烈であった。適切な組合員証を所持する者たちだけが、仕事にありつくことができた。CNTが支配した一定の諸部門では、CNTはその組合員を職につけることができた。UGTのある建設組合は、1936年12月8日の組合集会で、CNTが労働者たちに仕事についてのもっとよいチャンスを提供することができるので、彼らがCNTに加入しつつあることを、報告した<sup>80)</sup>。CNTがわずかに多数を占めていた集産企業体ファブリカシオン

78) 鉄鋼・冶金産業組合、板金工支部、1937年7月2日、1453、A S。

79) 評議会、1936年12月29日、1204、A S。自動車産業、1936年10月14日、1049、A S。

80) 建設組合の石工とれんが職人支部の議事録、1052、A S。

・ヘネラル・ド・コロレス [染料総合製造] での深刻な闘争は、どちらの組合が自分の組合員を数の限られた新しい仕事につかせることができるだろうかということにかんして、爆発した<sup>81)</sup>。この化学企業のUGT組合員は、CNTが新しい雇用を独占することによって、違法にしかも恣意的に活動したと言明した。1937年9月、UGT代表と評議員は、彼らの権利が再び侵害されるならば、ストを指定すると脅しさえしたのである。

革命期を通じて、CNTとUGTは、実力の不正な行使や不公平な戦術についての非難をやりとりした。UGTは、CNT集産企業体が負債のあるときカタルニア自治政府に援助を求めるが、しかし、もうけがでると余剰を蓄えると、抗議した<sup>82)</sup>。同様に、CNTは、「社会主義者たち」が彼ら自身のあいだで利益を分配していると非難した<sup>83)</sup>。両組合は、彼らの競争相手が、かけがえのない労働者ではなく、お気に入りを守るために「絶対必要な」地位を利用していると、主張した。他の者たちは、多くの労働者が、組合組織によって守られた多勢の「ぺてん師」(emboscados)のために、「士気が阻喪」してしまったと述べた<sup>84)</sup>。

どんなに重要であれ、諸組合間の緊張と闘争は、彼らが全産業を経営する上で遭遇した諸問題の類似性のために影を薄められていた。彼らのイデオロギー論争や組合員の引き抜き合戦にもかかわらず、彼らは、生産にたいして、したがって産業規律にたいして責任があった。彼らは、労働者を従順にしておくために協力した。多くの産業部門において、CNTとUGTは、無規律または低生産性のために解雇された労働者を再雇用しないことに合意した<sup>85)</sup>。バルセロナで、両組合傘下の諸連盟は、新年ボーナスを返上して、クリスマス祝典を取

---

81) UGTの闘士からUGTの書記長への手紙、1937年9月24日、P C。

82) 地方連盟の評議会、1937年10月2日、501, A S。

83) 議事録、カタルニア化学産業地域全体会議の第4部、1937年7月、531, A S。

84) 闘士総会議事録、1938年6月3日、531, A S。

85) UGT冶金労働組合、宝石・銀細工と付属品支部、集会、1937年7月3日、505, A S。

り止めさせるために一致して活動しようと試みた<sup>86)</sup>。全労働組合は、彼らが自分たちの組合員の利益に有害であると認めた政府のイニシアチブに反対するために、時には力をあわせたものだ<sup>87)</sup>。若干の産業、とくに繊維において、CNT-UGT共同委員会は、彼らの反目を克服して、両組織間で仕事の数を分割する雇用・慣行を採用することで合意した<sup>88)</sup>。

上述のように、CNTとUGTは、産業の再編成、すなわち国の生産諸力の集積、標準化、合理化、および発展の諸問題にかんして基本的に同意していた。1937年10月、共産党員であるUGTのある指導者は、闘争が継続するほど、「戦闘的プロレタリアートの両部門間のイデオロギー的かつ戦術的な相違」がせばまりつつあると、言明した<sup>89)</sup>。翌月のUGT大会で、若干の闘士は、「まず、生産の増加と改善のために〔CNTとUGTの〕行動の統一、第二に怠け者、破壊活動者、および思慮なき者を排除するための労働規律」を要求した<sup>90)</sup>。UGTの指導者たちは、「管理できないもの」を飼いならすためだけでなく、第三組合の結成を避けるために、CNTとの同盟を望んだ。第三の組合が大勢の賃金労働者を容易に引き付けることができるのではないかと、UGTの闘士たちは懸念していた。バルセロナのUGT連合の書記長は、労働者の組合選択権を支持した——しかし、CNTとUGTとのあいだで選ぶだけの権利であった<sup>91)</sup>。1938年3月、東部戦線が崩壊したので、CNTとUGTは、第二共和国の防衛を強化するために計画された統一綱領に署名した。共和国の軍隊では脱走者がますます増加していた。

86) UGT地方連盟, 1937年1月9日, 1311, A S.

87) 執行委員会, 1937年12月21日, 501, A S.

88) カタルニャ連盟, 1938年9月1日, 1049. 合同委員会, 仕立て屋支部, 1937年6月25日, 1219, A S.

89) Fronjosà, *La missió*, p.28.

90) *III Congrés de la UGT a Catalunya, informe de Josep del Barrio* (Barcelona, 1937), p.26.

91) 地方連盟の評議会, 1937年12月16日, 501, A S. 報告, 1938年8月7日, 1322, A S.

## 労働者の抵抗

CNTとUGTは、強力な軍需産業の急速な形成に協力する。CNTとUGTは緊急かつ絶対必要な仕事として、あらゆる種類のサボタージュと仕事における消極性にたいする厳格な警戒の精神、および生産を増大させ向上させるために、サボタージュと消極性の改善を確立しなければならない。

CNTとUGTは、生活費に結びつき、専門的カテゴリーや生産性を考慮している賃金が確立されねばならない、と信じている。この意味で、全産業は、「生産がより多く、より優れているほど、賃金がそれだけ高い」という原則を守るつもりである。

両組織は、国富の再生を切望し、経済を調整し、国家の独立がその最大限度まで保証されるように経済を合法的に秩序づける<sup>92)</sup>。

共産党は、この綱領を「人民戦線と民主主義をめざす偉大な勝利」を呼んだ<sup>93)</sup>。両組合における多くの者は、この協定を、マルクス主義とアナルコサンディカリズムとの総合、つまりマルクスとバクーニンとの友好的抱擁と考えた。もしそうならこの握手は、労働者にもっと激しく労働させ、組合と国家のためにもっと多く生産することを目ざしていた。

サボタージュ、窃盗、欠勤、遅刻、仮病その他の労働と仕事場に対する労働者階級の抵抗の諸形態に直面して、組合や集産企業体は、資本主義の企業が課した管理と同等な、あるいはそれを上回る厳格な規則や規制を確立するために協力した。1938年6月18日、軍服を製造していたゴンサロ・ユプロンス・イ・プラト集産企業体のCNTとUGTの代表は、「満足な説明」ができない生産の重大な低下を報じた<sup>94)</sup>。両組合の代表は、生産割当と作業スケジュールの尊重、欠勤の厳格な管理、および「技術者の道徳的権威の強化」を要求した。そこで働く450人の労働者のために慎重に計画した報奨制度を確立していた仕立て業集産企業体F・ベヒルス・ビダルは、1938年3月5日の総会で、かなり厳

---

92) José Peritas, *La CNT en la revolución española* (Paris, 1971), 3:37-39.

93) Bernecker, *Colectividades*, p.136 で引用されている。

94) ゴンサロ・ユプロンス・イ・プラト, 集産企業, 軍服, 1099, A.S.

格な一連の規則を承認した<sup>95)</sup>。ある個人は遅刻を管理するように指名され、あまりにも多くの遅刻は労働者の追放をもたらすことになっていた。病気の同志たちは、集産企業体の評議会代表の訪問をうけた。彼らは、もし在宅していなければ、罰金が科されることになっていた。多くの集産企業体におけるように、就業時間中に現場を離脱することは禁止されていたのであって、集産企業体内でなされるすべての作業は、集産企業体のためでなければならなかったし、このことは個人的プロジェクトが禁止されることを意味していた。包みをもって作業場を離れる同志たちは、点検を命じられた警備員に、その包みを示すことが要求された。労働者は、もし盗み、詐欺、またはなにかの不正な出来事を見つけたら、それを報告するか、またはそれに責任を負うかしなければならなかった。技術者たちは、各自の部門の失敗と成果にかんする週間報告をだすことを要求された。同志たちは、「企業内外の秩序」をかき乱すことを許されなかったのであって、集会に出席しないすべての労働者は罰金を科された。

衣料品産業の多くの他の集産企業体は、同じく一連の規則を定めていた。1938年2月、パンタレオニ・ヘルマンズのCNT-UGT評議会は、3日から8日にわたって作業や賃金を停止するぞと脅すことによって、非公認の運動を禁止した<sup>96)</sup>。ラバト社（大部分女性を雇用している）のCNT-UGT管理委員会は、就業時間中、仕事にかんする会話だけを認めた。アルトグストのような、労働者たちに増産を求めてうまくゆかなかったその他の集産企業体も、会話や電話の呼出しを受けるのさえ禁止する規則を強要した<sup>97)</sup>。1938年8月、CNT、UGTおよびカタルニア自治政府からの代表が出席して、A. ラノウ社の労働者集会は、遅刻、仮病、および就業中の歌唱を禁止した<sup>98)</sup>。バダロナのCNTとUGTの組合は、病人の管理に着手して、すべての労働者が各自の欠勤を弁

95) 以下の報告は、企業の職務規程案による。1099, A S。

96) 労働者が管理するために必要な内部規約案, 1099, A S。

97) アルトグスト社の労働者の定例集会, 1938年9月6日, 1099, A S。

98) アントニオ・ラノウ社の従業員によって承認された議事録, 1938年8月15日, 1099, A S。歌唱についての類似の禁止としては、規則, コスタ集産企業体, 1938年9月22日, 1219, A S。



## 労働者の抵抗

明しななければならないことに合意した。組合が主張するには、週労働時間が24時間に短縮されたことを考えると、欠勤は「理解できない」し、「乱用」であった<sup>99)</sup>。いくつかの集産企業体では、労働者は自分の直系の家族の死にたいして最大3日の休暇を受け取った。企業もまた、その全従業員が空襲、または警報のあとすぐに、仕事に復帰することを要求した。CNT冶金組合は、生産が「どんな口実もなく」再開できるのを保証する措置をとることを、闘士たちに勧告した<sup>100)</sup>。

これらの規則や規制の厳格さは、多くの繊維・衣料品企業における生産と規律の低下の結果であったようによく思われた。1937年6月15日、CNT-UGTのマリャフレ社の会計士は、その仕立て業工場にかんする報告書を公表した。彼は、同集産企業体の経営陣が誠実であり、道義的であったと、結論を下した。しかしながら、生産は、「その問題のもっともデリケートな部分」でありつづけたのであって、「生産のなかに、商工業の成否の秘密がある<sup>101)</sup>」のであった。もし工場の生産高がその現在の極端な低水準を持続するならば、その企業——集団化されていようと、管理されていようと、あるいは社会主義化されていようと——は失敗すると、会計係は警告した。現行の生産は、1週間の必要経費の補填さえしていなかった。企業が生き残ろうとすれば、生産高は増大しなければならない。もう一つのCNT-UGTの衣服集産企業体アルトグストは、「工場の全員にたいするわれわれの不断の要求にもかかわらず、われわれは未だに生産高の改善に成功しなかった」と、1938年2月に公表した<sup>102)</sup>。30人の労働者をもつ小さな衣服製造企業J.ラノウは、同じような問題をかかえていた。1937年11月のその会計係の報告によれば、たいていの女性従業員は、事故と疾

---

99) *Boletín del Sindicato de la industria fabril y textil de Badalona y su radio*, febrero 1937; 職務規程, 衣服のパラレダ社, 集産企業体, 1219, A S. 職務規程, エウダルド・ペラモン, 1938年9月1日, 1219, A S.

100) 規則, 1219, A Sを参照。通達 no.37, 1938年3月19日, 1084, A S.

101) CADCIの会計係によって作成された報告マリャフレ社の報告, 1937年6月15日, 1099, A S.

102) アルトグストからCNT仕立て屋支部あての手紙, 1938年2月9日, 1099, A S.

病の保険をかけられていた。彼女らは生産給付をもっていた<sup>103)</sup>、労働者は、所有者や、CNTから2名、UGTから1名の代表で構成された管理委員会と良好な関係をもっていたと伝えられている。しかしながら、生産は20%減少していた。その問題を正すために、会計士は、工場にも売上高にも「明白な生産割当」を設定することを勧告した。労働者たちが経営者側と誠心誠意の関係をもっていた他の諸企業でも、会計士は、同様に生産性を増大させる措置を勧告した<sup>104)</sup>。ある衣料品企業の取締役は、集まった労働者に次のように語った。「経済に抗するすべてのこの革命は、中止されなければならない。この企業が……重病であり、手あつい看護を必要としているのであるから、諸君は最大限の生産性を維持しなければならない。この企業は、必要な労働の注入をもってはじめて回復するであろう。もしこのことが起こらないならば、外科医が必要なメンバーを切断するために招かれるだろう<sup>105)</sup>。」もしいく人かが解雇されるならば、「それは、わずかで拙劣な生産にたいする諸君の責任である」と、彼は警告した。CNT代表は、各自の仕事をしなない者たちは「集産企業体のねずみである」と、つけ加えた。集会は、3人の労働者の解雇に同意した。その他の集産企業体で、個々の賃金労働者たちは、さまざまな理由、つまり仮病での怠業、欠勤、非公認の休暇や「不道徳」のために解雇されたか、あるいは停職させられた<sup>106)</sup>。不道徳の告発は、スペイン革命をつうじて珍しくなかったのであって、組合活動家が仕事でのどんな不適格性、あるいは失敗も、また放浪生活一般を、それほど罪深くないとしても、「不道徳的」とみなしたことを、明らかにしていた。

1938年2月、国有鉄道評議会は罰則を制定したのであって、それは、欠勤、無規律、低生産性、泥酔、および遅刻にたいする罰金や停職を含んでいた。評議会がねらっていたのは、「8時間（法定日労働時間）より短いあらゆるタイ

103) J・ラナウの再調査報告（会計係が署名）、1937年11月15日、1099、A S。

104) 報告、1938年8月、1219、A S。

105) 議事録、1938年7月12日、1219、A S。

106) アレマニ社、1937年6月23日、1219、A S。ラパツ・パラウ、1938年7月8日と10月25日、1219、A S。繊維委員会からの手紙 no.7（日付なし）、1085、A S。

プの労働日の増大や、どんな権限のある組織によっても是認されることなく、自然発生的に生じて、一日以上長続きしえないし、長続きすべきでない平日の休暇」を、除去することであった<sup>107)</sup>。仕事で負傷したと主張する労働者は、就業時間中にその保健部へ直ちに報告することを、MZAは要求した<sup>108)</sup>。事故の原因となった不注意は、新しい規則と新しい管理技術をもたらした。1937年3月、ある衝突が重大な「道徳的」および「物質的損害」となり、損害は「何千ペセタ」と評価された。「それを集産企業体は、ある同志の職場放棄と怠慢のために支払わねばならなかった<sup>109)</sup>。」委員会は、制裁を課すことを決定して、「全鉄道労働者の心理（学上の）—技術的検査にかんする研究」を結果として「創出」しなければならないと議論した。

1938年1月、經濟部会で、CNTは「生産者の義務と権利」を決定した。それは、「労働者の量、質および品行に……公式に責任をもつ」ことになる「課業配分者」の地位を確立した。この課業配分者は、「怠惰または不品行」を理由として労働者を解雇できた。その他の役員は、「原因に疑問のある」ささいな労働災害が適法であるか、「偽り」であるかを点検することになっていた。加えて「すべての労働者と使用人は、各自の専門的および社会的な個性の詳細が記録されるだろうファイルをもつであろう<sup>110)</sup>。」

CNTが政府に参加しつつあった1937年3月には早くも、18才から45才までの全市民（兵士、役人、および病弱者だけが免除された）は、「労働証明書」を所持しなければならなかった<sup>111)</sup>。当局は「いつでも」このカードをもっているかと尋ねることができ、それを携帯しなかった者たちを防備の工事に指名しただろう。違反者たちは、「カフェー、劇場その他の娯楽場所」で発見されるならば、30日間投獄されることが可能であった。右翼やその他の人々は、防備

107) 国有鉄道評議会，通達 no.3，精勤手当，1938年2月26日，1043，A S。

108) 議事録，MZA，1937年4月8日，531，A S。

109) 総会議事録，中央委員会，1937年3月16日と18日，531，A S。

110) Peirats, *La CNT*, 3:21.

111) 「労働証明書」を創設した政令，1937年3月4日，259，A D。証明書それ自体については，カタルニャ自治政府 252，no,13，A S。

の工事を避けるのに必要な証明書を入手するために、あらゆる種類の策略を用いなければならなかった<sup>112)</sup>。連合は、このようにして、生産者の道義、すなわち生産的な能力を詳細に記載した「生産者の身分証明書」に対する旧来のアナルコサンディカリストの希望を実現した。

ほとんどの制約が労働者を働かせるように計画されていたのだけれども、一つの規則は二つの仕事をもつ、あるいは超過勤務を要求する労働者の存在を確認した。これらの賃金労働者が労働を受け入れたのは、革命、または大義の必要ではなく、個人的、または家庭的必要のためであった。失業者を労働力に統合しようと望んだ革命前の労働者運動の伝統を継承して、集産企業体はしばしば二重雇用や超過勤務を禁止した。一定の集産企業体で、労働者は二つの所得源をもつのを認められなかった。共産党の闘士たちは、二重の賃金を受け取る人々と、このような不正な罪を犯したという噂をひろめる人々の双方を解雇することを計画した<sup>113)</sup>。CNT組合役員は、管理された企業からの正規の賃金はもちろん、小さい商売をやっていると思われた1人の「やり手」の家庭を査察する日程を組んだ。UGT鉄道組合は、闘士たちに各自の所得源を記述して申告することを強要した<sup>114)</sup>。

若干の経営委員会が超過勤務を嚴重に思いとどませたとはいえ、融通がきかないものではなかった。繁忙期に必要な有資格要員を見出しえないとある企業が主張すれば、その企業は使用人が超過時間勤務をする許可を受け取った<sup>115)</sup>。軍需・民需両部門における熟練要員にたいする需要を考慮すれば、超過時間勤務は、勝利のための必要条件であって、戦争関連労働にたいして正当化されていた。しかしながら、組合はしばしば超過時間が通常の率で支払われることを主張した。1936年12月、CNT冶金組合の高級装飾品部門の一闘士は、超過勤務手当が低いことを理由としてCNT集産企業体で超過時間勤務を拒絶した同僚の追放を要求した<sup>116)</sup>。

112) Luis López de Medrano, *986 días en el infierno* (Madrid, 1939), pp.192-93.

113) P S U C, radi 8, 1937年7月26日, 1122, A S.

114) CNT配給評議会, 1937年6月8日, 1446, A S. 国有鉄道組合, 1937年1月23日, 1482, A S.

115) 評議会総会, 1936年12月29日, 1204, A S.

## 労働者の抵抗

スペイン革命をつうじてバルセロナで、労働者たちは直接的および間接的に労働を拒絶することにかかりつづけた。彼らの活動は、弱体なブルジョアジーから継承した立ち遅れた生産諸力を発展させようとする闘士の切実な欲求と衝突した。したがって、闘士たちは、労働者を就業させ、抵抗を低下させるために、抑圧的な手法を採用した。彼らは、出来高仕事、解雇、休暇の削除、医療検査、および厳格な規則を実施した。パリにおける資本家や国家管理者と同様に、バルセロナにおけるアナクロサンディカリストやマルクス主義者は、俗世間の抵抗に抗して闘った。次章では、活動家の成果と限界を評価する。

---

116) 冶金特別組合の議事録、宝石店・貴金属店・時計店支部、1936年12月8日、1352, A S。

